

# 被災地でも お餅を食べて もらいたい

## 京都生協 みやぎ生協

京都生協職員ボランティアが主催する「支援餅つき大会」が、2011年11月27日、同生協本部で行なわれた。京都生協職員ボランティアは、取引先である鳥取県畜産農協と協力し、宮城県南三陸町の被災地と、宮城県漁協志津川支所の支援活動に取り組んできた。今回の餅つき大会は、鳥取の思いがこもった餅米を、京都で思いを込めてつき、12月3日に被災地に届けようという趣旨だ。



宮城県名取市から京都市に避難中の大庭龍二さんは、南三陸町の親戚のために、餅をついた。

ボランティアが参加できる場を、  
もっと京都につくりたい

京都生協職員ボランティアは鳥取県畜産農協（以下、鳥畜）と共に、みやぎ生協の産直生産者である宮城県漁協志津川支所の事業再開を支援するために、これまで現地に3度ボランティア隊を送ってきた。今回の餅つき大会は、志津川支所と、所属する漁師の方が多く移り住んでいる仮設住宅での炊き出しで配る餅をつこうというものだ。餅米は、鳥畜が飼料用米などを作付けする水田に餅米の苗を植え、それを収穫し提供した。

「震災後間もない時に、『冬には被災地で餅を食べてもらおう』と話し合い、餅米の栽培を始めました。年単位での支援が必要だということはすぐに分かりましたから」と、鳥畜の代表理事事務の橋本幸雄さんは語る。

鳥畜は、以前から地域の子どもたちに田植え体験の機会を提供してきたが、今回は子どもたちによる「復興支援大田植え大会」を実施した。

提供された餅米は計300kg。炊き出し当日に現地で作く60kg、京都の別会場でつくられた60kgを除く180kgが、この日京都生協の本部でつくられた。経験が豊富な方々の指導により、餅つきがスタート。きねを持つのは今回

が初めてという若者も含め、掛け声で盛り上げながら、にぎやかについていった。

10月にボランティア隊に参加し南三陸町へ行った経験を持つ、配達パート職員の奥戸和哉さんは、

「自分が行動したことに『ありがとう』と生の声が返ってくるのが、こんなにうれしいのかと思いました。この餅を届けに行くのもすごく楽しみです」と話してくれた。

この活動をリードする京都生協の福永晋介さんは、

「被災地支援は協同組合の本質を確認する機会にもなっています。業務に追われる毎日の中ではなかなか感じられないことを感じてほしい。それは生協にとっても、ボランティア参加者にとってもすごく重要なことだと思います。また、現地に行ける機会は限られ



約90人が参加した「支援餅つき大会」。



「支援餅つき大会」では、子どもたちもボランティアとして活躍。

ています。多くの人の『支援したい』という気持ちを生かす場を、もつと用意したいと思います。事務局の中からも、『京都に避難されている被災者のためにできることもしていこう』という声も出ています」と話す。

この日は、京都市を通じて、京都周辺に避難してきている被災地の方々も招いた。宮城県名取市の自宅を津波で流され、京都市山科区に避難中の大庭龍二さんは、餅を食べ終えると、自らもぎねを手にし、力強くついてみせた。

12月3日の炊き出し当日はあいにくの雨となったが、午前は志津川にある漁協の共同カキ処理場で、ボランティア隊による餅つきとバーベキューが行なわれた。みやぎ生協の組合員ボラン

## 京都でついた餅が、 宮城の被災者の手に

「南三陸町には親戚がいるんです。向こうに届けられると聞いたなら、ぜひつきたくってね。自分のついた餅がそっちに行くよって、連絡を入れようかと思っています」  
約90人の参加者が、朝9時から昼過ぎまで熱心に作業し、できた丸餅約5,000個は、保管場所まで炊き出しの日を待つことになった。



汁餅を味わう宮城県漁協志津川支所の皆さん。ボランティアとの交流が楽しみだという。

ティアが、つきたてのお餅で汁餅（とろろ昆布とみじん切りのねぎが入ったすまし汁のお雑煮）を作り、京都から弾丸バスツアーで到着したボランティア隊の20人がにぎやかに餅をついた。午前中の作業を終えた漁協の皆さんが集まってきた。汁餅とバーベキューを食べる。ボランティアとの交流をとても楽しみにしているという。

「南三陸町には親戚がいるんです。向こうに届けられると聞いたなら、ぜひつきたくってね。自分のついた餅がそっちに行くよって、連絡を入れようかと思っています」  
約90人の参加者が、朝9時から昼過ぎまで熱心に作業し、できた丸餅約5,000個は、保管場所まで炊き出しの日を待つことになった。



あいにくの雨でも、仮設住宅の炊き出しには終始、列ができていた。



ボランティアに囲まれ、お礼の言葉を掲げる自治会長の宮川安正さん（中央左）と宮城県漁協志津川支所所属の漁師の松岡昭広さん（同右）。松岡さんは「京都生協との付き合いがこのような形で継続するとは思わなかった。いつかは自分たちがおみやげをたくさん持って京都に行きたい」と語った。

途絶えることなく、650人分のお餅を配ることができた。  
後片付けを終えると、仮設住宅自治会長の宮川安正さんがあいさつに立ち、ボランティア隊に謝意を伝えるとともに、「先を見ようとしても、何も見えず、前へ歩こうとしても、こうして背中を押してもらおうことでもやっとな立っているという状況です」と語った。宮川さんの言葉からも、このような地道な支援を息長く続けていくことの必要性が、あらためて浮き彫りになった。